

大学生の生活世界に関する試論 —若者ことばから見えるもの—

脇 忠幸
(人間文化学科)

要旨：現代の若者（特に大学生）から見える世界（生活世界：life-world）とはどのようなもので、そこではどのような人間関係が構築されているのだろうか。本稿では、大学生が用いる若者ことばに注目し、彼／彼女たちの価値観や日常の一端を明らかにする。データとして、大学1年生対象の授業（のべ193名）にて収集した若者ことばを取り上げる。目につくのは、インターネットの影響である。学生にとって、この世界は、高い同期性と強い同調圧力、そして承認欲求に満ちていると考えられる。

【キーワード：若者ことば、大学生、承認、人間関係】

1. 問題の所在

いわゆる「若者論」の文脈において、現代の若者への評判は芳しくない。その多くは、「他者との摩擦を避ける」「人間関係が希薄」など、彼らの日常的なコミュニケーションに関連した評価である。

【若者よ、仕事は苦しいものだ】（会社顧問、男性、60歳）

（略）新卒で就職しても3年以内に辞める若者が高水準で推移しているとのことだ。辞める理由が情けない。就職前の期待と実態が違うとか、人間関係に嫌気がさしたとか、さらには仕事の責任の重さを負担に感じて辞めてしまう。こういう若者が増えたのはなぜか。「親が団塊世代で子どもたちを甘やかした」「テレビゲームの普及などによる対人アレルギー」、さらには「物事に向き合う忍耐力の低下」などが考えられる。（以下略）（朝日新聞、2012年10月2日朝刊）

この投書のように、若者論の多くは若者批判であり、その「問題」の原因を新しいメディアに求める傾向にある。

興味深いのは、若者側の自己評価も比較的低く、自世代のありように批判的な言説が見られる点だ。

【若い世代 意思疎通できる能力が大切】（高校生、男性、18歳）

企業が新卒者を採用する時に重視するのがコミュニケーション能力だという新聞記事を読んだ。（略）

記事によると、現代の若者はコミュニケーション能力が低下しているという。原因はインターネットを通じたやり取り、つまりLINEなどのSNSでの会話が日常的になっていることだ。直接会わなくても用件を伝えられ、私もその便利さは十分に理解している。しかし、絵文字などを使い続けると、文章の表現力が低下する欠点もある。人間関係の基盤とも言える会話だって少なくなるだろう。(以下略)

(朝日新聞、2014年5月12日、朝刊)

たしかに、日本における若者の自己肯定感や自尊感情が低いことは、数々の調査で明らかになっている(国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター編 2015)。かといって、ただちに現代の若者のコミュニケーションや人間関係に問題があると結論づけるのは拙速であろう。

事実、様々なデータを用いて、これらの評価を感情論として相対化する動きもある。浅野編(2006)では、東京と神戸の16歳~29歳男女(N=1110)を対象とした調査によって、従来の若者論への反証となりうる結果が報告されている。たとえば、【友人とのつきあい方】【親友に対して感じること】という二つの項目において、過半数を得た回答は以下のとおりである。

【友人とのつきあい方】

- ・「遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている」(65.9%)
- ・「友だちをたくさん作るように心がけている」(52.3%)
- ・「友だちと意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする」(50.2%)
- ・「初対面の人とでもすぐに友だちになる」(50.2%)

【親友に対して感じること】

- ・「真剣に話ができる」(79.3%)
- ・「自分の弱みをさらけ出せる」(59.7%)
- ・「一緒にいると安心する」(56.9%)
- ・「ケンカしても仲直りできる」(50.4%)

これらの回答から見えてくる若者像は、「他者との摩擦を避ける」「人間関係が希薄」といった従来の言説とは合致しない。一方で、遊ぶ内容によって相手を変えるという選択的な人間関係が垣間見える。こういった関係性をどのように評価するかは意見が分かれるところかもしれない。ただ、いずれにしても、従来の言説は若者の人間関係のあり様を捉えきれていないことがわかる。

現代の若者像をさらに複雑にするのは、当事者である若者の中に自分たちの日常を肯定的に捉える意見が存在する点だ。古市(2011)は、1980年の『消費動向調査』と1985年生まれの自身の価値観／感覚を対照させながら以下のように述べる。

今の50歳くらいの人が若者だった1980年。僕からしてみれば、逆に彼らのほうこそ「不幸」に見えてしまう。(略)だって、そんなに受験勉強頑張りたくないし、インターネットも携帯電話もない生活なんて考えられない。(p.12)

彼の言うように、80年代の日本は、コンビニが目新しい存在であったし、受験が戦争に喩えられ、校内暴力が顕在化した時期でもあった。そのころの若者(＝現在の若者論の担い手)のほうが、よほど不幸であり問題を抱えていたのではないか。少なくとも、大人たちが見出すような「問題」は現在の若者たちにあてはまらず、若者批判は“余計なお世話”だというのである。こうした複雑な様相は、若者自身による主観的な認識と、非若者による客観的な認識(それもまた主観だが)とのズレを意味している。

一体、現代の若者にとっての〈日常〉〈世界〉とはどのようなものなのだろうか。その〈日常〉〈世界〉では、どのような人間関係(に関わる価値観)が構築されているのだろうか。本稿では、大学生が用いる若者ことばに注目し、彼／彼女たちの生活世界(life-world)の一端を明らかにする。そこには現代社会における現代性の源泉があるに違いない。

2. 対象とするデータと分析方法

データとして、大学1年生対象の授業(「日本語表現法」:2013年度～2014年度、のべ193名、2年生以上の学生3名を含む)にて収集した若者ことばを取り上げる。「収集」といっても、質問紙調査やインタビュー調査をしたわけではない。

まず、「若者ことば」の定義「10代後半から30歳くらいまでの男女が、仲間内で、娯楽・会話促進・連帯などのために使うくだけた言葉」を示し、事例を挙げながら概説を行った。その後、グループワークをとおして、学生自身に「若者ことばだと思うもの」をワークシートにまとめさせ、グループごとに一覧表を作成、報告、提出してもらった。本稿ではその一覧表に書かれた語句を「若者ことば」として取り扱う。

なお、ワークシートには、「あなたが「若者ことば」だと思うものを、意味・用法とともに教えてください。」という質問文に加え、語形と意味・用法を記入する表が記載されていた。

こうして得られた若者ことばは、のべ627語、289項目(派生と考えられる語形はひとつの項目にまとめた)であった。後で見ると、これらは若者の生活世界を記述しようとするとき、非常に有用なデータである。一方で、以下のような限界も存在する(用例に付した数字は項目番号)。

- ①理解語彙と使用語彙の区別が不明。
- ②回答者が持つ属性（出身地／生育地など）が不明。
- ③アクセント等の音声情報が無い。
- ④「無回答」という回答
- ⑤一般化が困難な語：例「YK」（49）
- ⑥流行語の混在：例「あげぽよ」（54）、「今でしょ」（164）
- ⑦冗談との判別不可：例「チョベリバ」（188）

①②③④は、紙媒体での簡素な調査に起因するものだろう。①②は記入欄の工夫で解決可能であるが、③④はインタビュー調査などの対面式調査に切り替えない限り解決しがたい。

⑤⑥⑦は、若者ことばの調査そのものの困難を表している。⑤の意味・用法について、学生は「〇〇（※筆者註：イニシャルがYKの人名）の話をしているのをバレたくないときに使うことば」と説明している。このように極端に狭い人間関係でのみ用いられる語は、属性としての「若者」にまで抽象化／一般化できない。その一過性の高さから見れば、⑥⑦も同様に取り扱いが難しい。特に⑦は①とも重なる点で簡単に排除もできない。

本稿では、これらの語句はすべて排除せず、若者ことばとして認定した。その取り扱いについては今後の課題である。

3. 分析と考察

3.1 従来指摘されてきた表現

従来の研究では、若者ことばの特徴として、音声、語彙、文法など様々な観点から数多くのことが指摘されてきた（岩田・重光・村田 2013）。今回の調査でも同様の結果が得られており、若者ことばの造語法については基本的に今なお通説通りだと考えられる。以下、回答例を挙げる。なお、項目とイコールで結ばれているのは、学生が回答した意味・用法である。

【省略】

例「あーね」（51）＝あいづち／了解／「あーなるほどね」「そうね」など／あ
あ、そうだね／なるほどね！

例「キモイ」（136）＝きもち悪い

例「ぱねえ」（226）＝半端ない／はんぱねー／尋常ではない

例「JK」（36）＝女子高生／女子高校生

例「KY」（40）＝空気読めない／空気よめねー／空気が読めてない

- 例)「JS」(34)＝女子小学生
- 例)「JC」(35)＝女子中学生
- 例)「JK」(36)＝女子高校生／女子高生
- 例)「JD」(37)＝女子大学生／女子大生

これらに共通する要素は、年齢である。男性に関する語には、このような表現は見当たらない。すなわち、女性性を支える要素の一つは年齢であり、ある程度の年齢を超えるとステイグマとして利用されることがわかる。「JS」「JC」「JK」「JD」のように若年層がやや細かくカテゴライズされていることからすると、女性性において「年齢的な若さ」が社会的な価値を持つと認識されていると考えられる。ただ、その「若さ」は学校という所属先、つまり児童／生徒／学生という属性に担保されたものであって、単純に年齢だけとは言えないかもしれない。

一方、男性に関する語は、「アスパラベーコン」(59)と「優男(やさお)」(267)しか見当たらない。「アスパラベーコン」は「肉食に見えて草食系」との回答があり、「優男」は「優しい男」を意味するプラス評価の語である。素直に受け取れば、男性性を支える要素は性格やふるまいということになるのかもしれない。なぜ数ある因子のなかから「恋愛におけるふるまい」と「優しさ」が選ばれたのかは、よくわからない。

また、回答者が男性なのか女性なのかで、何らかの偏りや差異が発生し得る項目だと考えられるが、今回のデータでは性差の追究が不可能である。今後の課題としたい。

ただ、語彙の豊富さ＝社会における有標性 (marked) という図式にあてはめると、かつて野呂 (1988) が指摘した男性優位の社会構造は、今もなお健在だと言えるのかもしれない。

3.3 同期的な「つながり」と同調圧力

次に、対人関係へとより焦点を絞ってみよう。学生の回答からは、周囲との関係から外れ、一人になること (あるいはその可能性) を有標とする傾向が見てとれる。

- 例)「KY」(40)＝空気読めない／空気よめねー／空気が読めてない
- 例)「ヒトカラ」(229)＝一人でカラオケに行く
- 例)「ぼっち」(242)＝ひとりぼっち／独り
- 例)「くりぼっち」(243)＝くりを一人ぼっちです (筆者註：クリスマスを一人ぼっちで過ごす、の意か)

「ひとり」を有標とすることは、「ひとり」に対する何らかのサンクションを予期させる。こ

の場合、おそらく負のサンクションであり、これらの語句はスティグマとして機能していると考えられる。これに対して学生たちの回答には、その状態を忌避（すべきと）する態度が透けて見える。稿者の周辺には、「ぼっち」をコミュニケーションの資源として自嘲気味に用いる学生も存在するが、そのこと自体、彼／彼女たちに向けられた同調圧力を意味しているだろう。

すなわち、こうした「ひとり」への忌避と不寛容は、「つながり」の欲求（喚起）と表裏一体であると考えられる。興味深いのは、関係性（つながっている状態）に関する語が、「いつもめん」（65）と「はつめん」（66）しか見当たらない点である。それぞれ「いつものメンバー」と「はじめてのメンバー／はじめてのメンツ」という意味であるが、こういった「どのような関係性か」についての視線は比較的緩やかである。やや大げさに言えば、「何であれつながっていればよい」ということであり、裏を返せば「それでもなおつながれない人間は異常である」という価値観に帰着しうる。こうした「異常」性を表示する表現として、以下のようなのものが挙げられる。

例「コミュ障」（155）＝コミュニケーションができない人／人づきあいがて

例「中二病」「厨二」（187）＝へりくつをゆってなんもしなくなること／精神病の一種／中学2年生っぽい人間／中学二年生にありがちな「自分は特別な存在なのでは？」というもう想にひたりマンガの世界のような事を言ったり考えたりする。

例「病む」（271）＝悩む。落ち込む。困る。

このように、現代の大学生にとって、つながれないことはもはや「障がい」であり「病気」なのだという。もちろん、これらの表現は自嘲を込め誇張されたメタファーであり、額面通り受け取るわけにはいかないだろう。ただ少なくとも、つながれないこと＝異常という価値観をそこに見出すことは可能だ。若者批判を口にする人からすれば、この「病気」というメタファーは論理性を欠いた飛躍に見えるかもしれない。しかし、かつて盛んに指摘された「社会の心理学化」の影響を考えると、人間関係上の、すなわち社会的な「異常」を、個人的な「病気」に還元して表示することはむしろ理解しやすい。と同時に、「病気」でしか逸脱を許されないという逃げ場のない同調圧力も透けて見える。

こうした「誰かにつながっていなければならない」「ひとは避けねばならない」という強迫観念にも似た価値観は、土井（2009）が若年層（特に中高生）の特徴とした「摩擦のないフラットな関係」「キャラ」を介した予定調和の世界を支えるものだと考えられる。だが、ここで改めて考えてみると、この「誰かにつながっていなければならない」「ひとは避けね

ばならない」という二つの価値観は矛盾をはらんでいる。すなわち、学生たちは「ひとり」を忌避する一方で、集団での直接的な／積極的な関係性を築くことも避けているのである。このどこか“アリバイ作り”にも似た関係性は、従来提示されてきた「排除と包摂」「ソトとウチ」などといった二元論的な／静的な分析概念では捉えがたいものであろう。

大学生たちは、一体何に対して“アリバイ作り”をしているのであろうか。その手がかりとなるのは、以下のような SNS に関する語句である。

例) 「ツイ廃」(4) = ツイッター廃人

例) 「ういる」(6) = みらいにする事／未来のことをゆうときにつかう／未来／未来形／～するつもり

例) 「なう」(7) = 今／今の事／今現在のことをゆうときにつかう／Twitter など
で「今、～をしている」という表現／現在進行形／広島なう←
現在進行形でやっている事 (広島にいる) / Now (今)。「ごは
んなう」= 今、現在／※無回答／今／現在進行形／最近／最先
端／今まさに

例) 「わず」(8) = ちょっと前の事／過去のことをゆうときにつかう／広島わず←
完了 (広島にいた) / was (過去)。「ごはんわず」= 終了した
こと／おわった／過去形／過去形／ちょっとまえのこと／おわ
った／行った／～だった／過去

例) 「あーね」(51) = あいづち／了解／「あーなるほどね」「そうね」など／ああ、
そうだね／なるほどね！

例) 「それな」(52) = 同意すること

例) 「とりあ」(203) = とりあえず

例) 「とりま」(204) = とりあえずまあ略／とりあえず、まあ

例) 「りょ」(282) = 了解

これらはいずれも主に Twitter や LINE といった SNS で用いられる／用いられていた語句である。日常会話で一部用いられることも興味深い点だが、ここで注目すべきはその必要性だろう。「あーなるほどね」「了解」「とりあえず」などという表現が、省略を要するほど長いとは思えない。

この不可思議な省略については、次の二つの解釈が可能であろう。一つは、規範からの逸脱という社会言語学的な解釈である。若者が、言語規範からの逸脱によって、自らのアイデンティティを確立させようとする事象は以前から指摘されてきた。今回の不可思議な省略も、他の世代とは異なる独自の言語を欲した結果だと考えられる。ちなみに、40代ぐらいになる

と、むしろ言語規範に忠実になるという（岩田・重光・村田 2013）。言語意識とも深い関連を持つこの事象から考えると、現在若者ことばを使用している学生たちも、いずれはこれらの言葉の大半を使わなくなると思われる。

もう一つの解釈は、これらの背景にケータイの普及がもたらす同期性と即時性への圧力があるという、コミュニケーション論的なものだ。かつて、ケータイ（当時の想定はいわゆる「ガラケー」）の普及が「絶え間なき交信（perpetual contact）」の時代をもたらすと指摘されたが（Katz & Aakhus 2002）、現在の若者を取り巻く状況はまさにその通りだと言えよう。「絶え間なき交信」は、高い同期性を有する「つながり」への圧力を生み出した。今や、スマートフォンの所有を前提として社会はデザインされており、連絡先を交換するにも、お店の特典を得るにも、すべてスマートフォン経由である。このことは、スマホ非所有者（ガラケー所有者も含む）に対して、「なぜ／まだ持たないのか」という問いが日常的に成立することからもわかる。すなわち、スマホを持たない＝誰かとつながる意思がないという価値観の存在が見てとれるのである。

くわえて、LINE や Twitter などオンラインでのつながりは、同期性の高い“24 時間監視”の状態であり、その中でコミュニケーションでは、即時性が一つの価値を持ち始める。言語的な情報や絵文字などの情報だけでなく、反応の速さも相手の意図や感情を推論するうえで重要な情報となりうるのである。その際、有標な反応とは“遅い”反応であり、余計な詮索をされたくなければ、相手から“遅い”という評価を得ぬように注意を払う必要がある。

前述の不可思議な省略は、こうした同期性と即時性への圧力があればこそだろう。「了解」を「りょ」と略すことで、わかりやすく明示的な記号となり、まるでスタンプを押すかのように簡単かつ即時に回答することができる。言語が記号であるということは言うまでもないが、その記号性がより高まり顕在化していると考えられる。

では、とにかく即時の反応さえしていればよいのかというと、そうではない。その反応は「KY」（40）であってはいけないのである。しかし、この「KY」という評価に客観的な基準は見えてとれない。大石（2009）は「空気が読めない」ことの因子として、先行研究に依拠しつつ「感情の統制」「相手の反応の解読」「対人反応の実行」などを挙げるが、同時に、「空気が読めないと判断される言動は、日常生活のどこにでも転がっている。」とも指摘する。誰でも「KY」になりうるのであれば、「KY」だとされた人間とそうでない人間の境界はどこにあるのだろうか。実のところ、それは「ふつう」という、漠然としていながらも強力な同調圧力から外れていると誰かにみなされたに過ぎない。つまり、「KY」とは参与者間で成立するコミュニケーション上の構築物であり、スティグマ（Goffman 1963）そのものだと考えてよいだろう。

「KY」の付与に見られるような「正解」の不在は、私たちが生きる現代社会＝後期近代を象徴しているようでもある。現代社会は、中間集団と「大きな物語」の変容に伴い、個人が

常に絶え間ない自己不安にさらされている。「正解」はわからないが、とりあえずスティグマは回避しながら「正解」（正答）への“アリバイ作り”をしたい学生にとって、過去のやりとりをすぐに確認できる LINE の登場は“渡りに船”であったろう。過去のやりとりや他者（たち）のやりとりを把握しやすいということは、自己呈示（印象管理と印象操作）に対する確信を得やすくなるということでもある。すでにケータイメールの普及時から自己呈示との関わりは指摘されてきたが（杉谷 2007）、LINE の爆発的な普及の背景には、これにくわえて「正解」の不在／渴望が強く関わっていると考えられる。

3.4 リアルな「非リアル」と承認欲求

前節で見てきたように、学生たちの生活世界は、高い同期性と強い同調圧力に満ち溢れている。そこから逃れるには、「コミュ障」として「病む」しかない。このように「正常」 - 「異常」の基準／象徴として「コミュニケーション」が用いられることは、現代における「コミュニケーション偏重主義」（斎藤 2016）の表れと見てよいだろう。

2000年代に入って心理学ブームが退潮するとともに前景化してきたのが、「コミュニケーション偏重主義」である。これは単純に言えば、対人評価の基準がほぼ「コミュニケーション・スキル」に一元化されてしまうような事態を指している。いまやそれは、単なる「若者の気分」を超えて、一種の職業倫理のようなものにすりなりつつある。その結果として、コミュニケーションであることは無条件に善とみなされ、コミュニケーション・スキルの有無は、就活などをはじめとして、しばしば死活問題に直結する。

このような社会にあっては、「発達障害」などの正当な理由なしに、コミュニケーションならざることは承認されにくい。（斎藤 2016: p.65）

こうした状況は、大学生の生活世界においてかなり広範囲に広がっていると考えられる。なぜなら、「リアル」（279）な世界だけでなく、インターネット上（「非リアル」と言ってよいだろう）においても同様の高い同期性と強い同調圧力に直面するからだ。

今回の回答を見ると、インターネットにおける〈日常〉が、大学生の〈日常〉にとっていかに大きな影響力を持っているかがわかる。

例) 「orz」（41）＝ひざをついて、くずれおちてしまう様子

例) 「w」「草」（46）＝笑う／笑／「笑い」の略（笑い＝w）

例) 「乙」（100）＝おつかれ／やっちゃった／どんまい／おつかれー／おつかれ様

例) 「タヒレ」（178）＝死んでしまえー

例)「厨二」(187) = (※前述のとおり)

例)「ノシ」(215) = さよなら

これらはすべて視覚的な記号であり、一種の遊びである。パソコン通信以来のアスキーアートもこうした類のものであり、インターネット上(非リアル)の「リアル」が、現実の「リアル」と深く関わっていることがわかる。現代の大学生にとって、「リアル」と「非リアル」は浸透度が高く、互いを包摂し合う関係なのだろう。

しかし、なぜ目の前の現実をことさらに「リアル」と指示/同定する必要があるのだろうか。若者ことばの発信源でもある動画サイト「ニコニコ動画」を事例として、承認欲求という観点から考察を加えてみよう。

ニコニコ動画は動画サイトとしてその地位を確立し、今でも毎日無数の動画がアップされる。近年は「ニコニコ生放送」のような生配信が人気を集め、もはやテレビに代わるマス・メディアと言って差し支えないだろう。ニコニコ生放送は「生主(なまぬし)」と呼ばれる配信者が、思い思いの放送を「誰か」に向けて行うものである。インターネットの革新性が、誰でもメディアの発信源になることが可能な点にあるとすれば、まさに当該サイトは日本における革新の象徴であろう。生主が放送する内容は多岐にわたるが、なかには自分の日常を一方的に話すものやゲームをしている様子をただ実況するだけのというものもある。

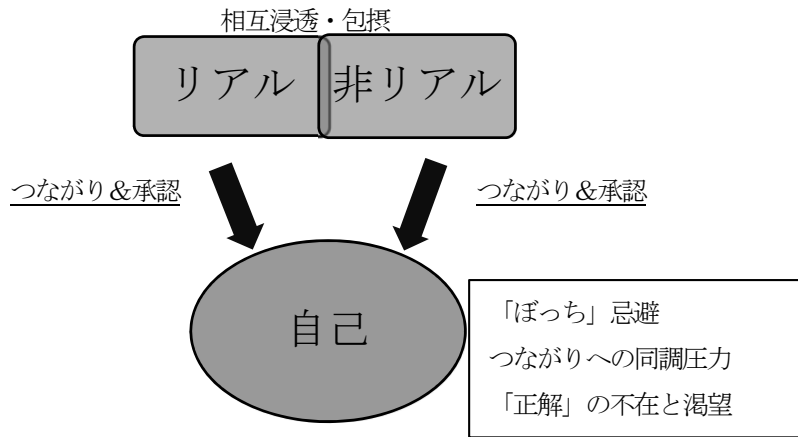
生主たちが、「情報の発信者」という特権性を介して自らの承認欲求を満たそうとしていることは、比較的わかりやすい。一方で、視聴者の欲求はどのようなものなのだろうか。これを解く鍵は、ニコニコ動画の「広告」というシステムにある。これは、ユーザーが自分の「ポイント」(現金)でサイト上の動画や生配信を宣伝する(サイト上において目立たせる)というものである。ということは、当然、見知らぬ誰かのために自らのポイントを使って広告をうつ、という事態が発生する。この極めて利他的な行為にこそ、学生が「リアル」を生み出し求める理由が隠されている。

自分の広告によって周囲から認められるのは、自分ではない「誰か」である。しかし、自分が支持する存在が認められることで、自らも間接的に認められる。このような間接的な承認を得る行為こそ、かの「広告」なのだろう。そこには、自分が認めた人が認められる、自分だけがその良さを知っている、という快感が潜んでいる。

ニコニコ動画は代表的な事例であって、こうした間接的な承認はインターネット上に溢れている。Twitter や Instagram でフォロワー数に価値をおくことも、オンラインゲームでキャラクターに自己投影することも、結局のところ承認欲求を満たそうとする行為にほかならない。同時に、それは、学生たちに逃げ場がないことを意味する。もはや「リアル」も「非リアル」も「コミュニケーション偏重主義」であり、常に誰かのまなざしのもとにさらされているのである。この逃れようのない“24 時間監視”は、新たな「まなざしの地獄」(見田

1979) の誕生と言えるかもしれない。

こうした状況をごく簡単に図示すれば以下のようなになるだろうか。



学生たちは、「リアル」と「非リアル」において誰かとつながりを持ち、承認欲求を満たそうとしている。それには「ぼっち」の回避というメリットも認められる。が、同時に、それら二つの世界において誰かとつながることを強く求められ、そこから逸脱することが基本的に許されない。くわえて、ありもしない「正解」に気を取られ悩み苦しむ。しかも、冒頭に挙げた古市氏のように、学生自身がそれを無自覚に受容している向きもある。私たちは利便性の先にあるユートピアを追求した結果、とんでもないディストピアに足を踏み入れてしまったのかもしれない。

4. おわりに

本稿では、大学生の若者ことばを分析することで、彼/彼女たちの〈日常〉〈世界〉の記述を試みた。その結果、従来の指摘を再確認できた部分もある一方で、「つながり」をめぐる同期性と同調圧力、そして承認欲求といった新たな視点を提示することもできた。

かつて山田 (1936) は、「口語は自然と変化(「流轉」)するが、書き言葉(文語)はそうした変化をしない」「言文一致をいくら試みても両者が一致することはない」旨を論じた。もちろん80年経った今でも有効な論であるが、今回確認した若者ことばから見えるのは、その関係の一部破綻である。いみじくも山田が定義づけたように、文字(書き言葉)とは視覚的な要素を持つものである。とすれば、インターネット上の言葉を「書き」言葉と見ることも可能であろう。「w」「草」のように、書き言葉はそのスタイル内で変化を遂げ、むしろ話し言葉がそれを追いかけるような状況が明らかになった。

今回の分析における限界点はすでに述べたとおりだが、記述をすすめていくなかで改めて気づくこともあった。まず、「若者」「大学生」というカテゴリー問題である。冒頭で述べた

ように、従来の議論では一様に彼／彼女たちを同一カテゴリーに押し込めてしまい、その多様性に目を向けてこなかった。今回の議論でも、同様の物足りなさが残ってしまった。その意味で、Boyd (2014) の「デジタルネイティブ」に関する指摘は非常に示唆的である。

デジタルネイティブという概念は、その内容が肯定的であろうと否定的であろうと、はじめに意図したところを超えて深刻な事態をもたらした、言葉そのものが問題含みだったというだけに留まらず、テクノロジーに関するスキルとメディアリテラシーは公平には行き渡っていないという事実をぼやけさせ、誰もが一様にデジタル時代に適応しているという誤った若者像を提示し、「ネイティブ」となるのに求められる特権は一体どれくらいなのかを無視していた。(pp.293-294)

今後は、インタビューなどの追加調査により、動的で連続的な記述研究として精度を高めなければならない。

また、若者ことばによってその使用者の生活世界を描き出すという今回の試みは、コミュニケーション論や承認をめぐる議論と密接な関係にあることが示唆された。承認論については、ヘーゲルやホネットなどによってすでに綿密な検討が重ねられている。今後はこれらの論とも結びつけながら、考察を深める必要があるだろう。

そもそも、授業内において若者ことばを学生に自己申告させた目的は、自己を含めた「あたりまえ」を相対化させることにあった。いわば学生による当事者研究であって、授業での反応を見ると学生の目には新鮮なものとして映っているようである。今回の分析の当否とは別に、こうした授業実践は今後も続けていきたい。

参考文献

- 浅野智彦編.2006.『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』勁草書房.
- Boyd, D. 2014. *It's Complicated: the social lives of networked teens*. New Haven, Yale University Press. (=2014, 野中モモ訳『つながりっぱなしの日常を生きる ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』草思社)
- 土井隆義.2009.『キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』岩波書店.
- 古市憲寿.2011.『絶望の国の幸福な若者たち』講談社.
- Goffman, E.1963. *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Engle-wood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, Inc. (=2003, 石黒毅訳『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房)
- 岩田祐子・重光由加・村田泰美.2013.『概説 社会言語学』ひつじ書房.

- 陣内正敬・友定賢治編.2005.『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』和泉書院.
- Katz, J.E. & Aakhus, M. 2002. *Perpetual contact: mobile communication, private talk, public performance*, Cambridge: Cambridge University Press. (=2003, 富田英典監訳『絶え間なき交信の時代—ケータイ文化の誕生』NTT 出版)
- 見田宗介.1979.「まなごしの地獄—現代社会の実存構造—」『現代社会の社会意識』弘文堂, pp.1-57.
- 野呂香代子.1988.「日本語と「男女の文化」—日常語がつくる知識体系と圧力—」『待兼山論叢 日本学篇』22, pp.55-75.
- 大石千歳.2009.「「空気が読めない」とはどういうことか? : 社会的スキルの欠如という観点からの検討」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』44, pp.87-96.
- 斎藤環.2016.『承認をめぐる病』ちくま文庫.
- 杉谷陽子.2007.「メールはなぜ「話しやすい」のか? : CMC(Computer-Mediated Communication)における自己呈示効力感の上昇」『社会心理学研究』22-3, pp.234-244.
- 山田孝雄.1936.『日本文法学概論』宝文館出版
- 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター編.2015.『高校生の生活と意識に関する調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較—』国立青少年教育振興機構.

付記

本稿は、第17回日本コミュニケーション学会中国四国支部年次大会（2014年12月、於愛媛大学）における報告を改稿したものです。席上、ご意見いただいた先生方に御礼申し上げます。

title

An Essay on University Student's Life-World: from the Point of View of Slang.

author

Tadayuki Waki

abstract

The aim of this article is to analyze the University student's life-world from the point of view of slang. It should be noted that the internet affected their words and life-world. There is full of high synchronization, strong peer pressure, and desire for recognition in their life-world.

keywords

slang, University student, recognition, relationship